



Title	国語語彙史研究
Author(s)	前田, 富祺
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35517
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【2】

氏名・(本籍)	前	田	富	祺
学位の種類	文	学	博	士
学位記番号	第	7380	号	
学位授与の日付	昭和	61年	6月	24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	国語語彙史研究			
論文審査委員	(主査) 教授 宮地 裕			
	(副査) 教授 德川 宗賢 教授 信多 純一			

論文内容の要旨

本論文は、国語史の研究分野の一部門として近年ようやく認知されつつある国語語彙史の研究を、方法論的にも実践的にも確立させることを目指した著述である。

従来の国語語彙の研究は、古典文学作品の語句の注解、訓点資料・キリストン資料等の語彙に関する史的研究、現代語資料の語彙の調査研究が主なものであって、概括すれば、語あるいは少数語彙の史的調査研究、および、現代語彙の計量的・意味論的調査研究であった。本論文は、視野を語彙の通史に拡大して、語史・語彙史研究における基本的諸問題を考究しつつ、具体的・体系的に国語語彙史を論述したものである。

三部構成第一部「国語語彙論史」は、「古代（上代・中古・中世）」「近世・近代」の国語語彙の広義研究史を概論するものであって、国語語彙意識を基盤として国語語彙觀が生まれ、その上に近代の国語語彙研究が成立するとする立場をとる。この、「意識」と「觀」と「研究」を踏まえ、語彙体系を重視する観点から、国語語彙の広義研究史を論述している。

第二部「国語語彙史研究」は、主として、個別の語史を中心とする「ヒネモス・蝙蝠・モグラ・童・鱗・ハグクム・カタヅク」の調査研究、特定分野の語彙史としての「メクバセ・マジロク」類、武装描写語彙（軍記物語）、「クルクル（ト）・クルル（ニ）」類、および、〈手・指・掌・腕・足〉等の身体語彙の調査研究であるが、ほかに、文献国語史と言語地理学とのかかわりを、「踵」の調査研究を例として論じ、語彙史記述の方法論を、〈手〉から〈肩〉までの名称の古代身体語彙史を例として考察している。

第三部「国語語彙史論」は、第一部・第二部の調査研究の過程で考究した国語語彙史の理論的諸問題を、語・語彙・語彙体系・語彙史・語彙変化等について論述したものである。

たとえば、語彙体系については、五十音順語彙とか、その逆引索引とかの、単なる語の集合にとどまらず、意味分類語彙の内部的意味体系を語彙体系とする。つまり、食生活語彙・感覚語彙・身体語彙・数量語彙等、意味分野ごとの語彙の意味的な体系である。従って、複合語等の語構成別とか、基本語彙等の使用率別とか、語種別・地域別・位相別とかの語彙体系を追求するものではない。また、意味分野ごとの語彙体系と言っても、体系性の捉えやすい“もの”の語彙を中心とし、一部の“こと”の語彙を手がかりとして、時代ごとの語彙体系を、特定語彙について考究することから入るのが現実的だとする。

その結果の「記述としての語彙史」から法則的なものが追求されるが、それは、傾向的・経験的な法則らしきものであって、自然科学的法則とは異質とする。また全般に、文献国語史の一面としての語彙史が記述されるが、理論的には方言語彙史をも合わせた広義国語語彙史の記述があるべきだとしている。

また、語の基本的な意味としての「語義」と、語の文脈的・臨時の意味としての「語意」を区別し、語義は、その要素たるいくつかの「語義素」から成るのが普通であり、語義素は、「意味特徴」の結合によって成るのが普通だとする。そこで、「語義変化」とは、ある語義素から別の語義素が派生すること（時に移行すること）であって、おおまかには、語義素の変化、つまりは意味特徴の結合の変化として記述されるものとしている。

また、これらの論は、具体的調査研究の基盤となると同時に帰結となるべきものであって、相互にかかわりあって深化・拡充すべき課題であるとしている。

巻末に、既発表論文と本論文の各部・各章・各節との関係、書名・人名・事項・語彙のやや詳細な索引を付す。

論文の審査結果の要旨

本論文は、論者がその百余編の論文から選定した四十余編に手を加えて、未開拓な分野における嚆矢の一書としてまとめあげたものであって、この方面の研究の尖端に立つものと言うことができる。また、個別の語史としての細部を踏まえつつ、特定分野の国語語彙の史的変遷を巨視的に押さえることによって、国語語彙史を構築する方途を、実例を以て具体的に論述した点でも評価することができる。

「国語学史は国語意識史である」とする時枝誠記の所説に示唆を受けつつも、第一部において論者は、国語意識を広く一般の国語に対する無自覺的意識として捉えなおし、自覺された国語意識を国語觀として特立する点で、国語学史の見方に新見を加えた。そして、古代から近世までの国語觀が、あるいは詞辭の弁別、雅語・俗語の別、あるいは辞書に見られる語彙分類、文法研究における品詞別語彙分類などとして次第に発達し、その上に、明治以降の本格的国語研究が展開すると見たことは、語彙研究の史的変遷を辿るのに広い基盤を整えたものと言うことができる。そのうえで、広義国語語彙論史を、国語語彙意識史・国語語彙觀史・国語語彙研究史三者の総合として把握し、第二部の個別の語史や特定語彙史の調査・記述に対する理論的基礎としていることも、研究の正道を踏むものと言えよう。

通史としての語彙史は、それなりに廣汎な分野であるから、論者の理論と実践とが、十分強固な体系

的構築をなしているかどうかは、人によって評価が分かれようが、ようやく研究の進みはじめたこの分野で、よく大局を押さえた総合的論述となっていることは認められてよい。

第二部の国語語彙史研究は、個別の語史研究の方法論から始めて、語形・語義・用法の三つの変化の概念規定等の問題点を論じ、つづいて個別の語史および特定分野の語彙の史的調査・記述・考察を整然と展開する。詳細な考究によって解明される語史・語彙史は、論者の真骨頂を示すものであり、広く学界の認めるところともなっている。

とは言え、通史論述のための膨大な文献資料のこまかい扱いについては、節用集を例として論ずるにとどまるから、資料の考証等の細部については不安を覚える向きもあるであろう。大局を見通すためにはやむをえないところでもあって、長短表裏をなすことである。また、「語誌」の記述は、「語史」と「語彙史」との中間的位置に立つもののようにはあるが、その規定と分担範囲をもっと明確にすべきであったであろう。

論者の現段階でのまとめとして述べられる第三部の、語とはなにか、語彙とはなにか、語彙体系とはなにか、語彙史とはなにか、その時代区分をどう考えるか等、あらためての基礎論は、「研究の方法の研究」という観点からのもので、いずれも論者の省察が根本的課題に広く及んでいることを示す。論者は語史・語彙史の具体的調査・記述・考察を積みながら、これらの省察を重ねてきたから、その省察は着実な理論的考察ということができるけれども、同時に、論を深めて語彙体系と語彙史とのより強く大きな総合を果たすことは、みずからも随所に言及するとおり、今後の課題に属するところも多い。

以上、本論文は、新しい分野に一步を踏む成果を挙げ、斯界の今後の発展にも大きく寄与する力作ということができる。よって本研究科委員会は、本論文を文学博士の学位に十分価するものと認定する。